

南信州地域の発展方向

飯田市・松川町・高森町・阿南町・阿智村・平谷村・根羽村・
下條村・売木村・天龍村・泰阜村・喬木村・豊丘村・大鹿村

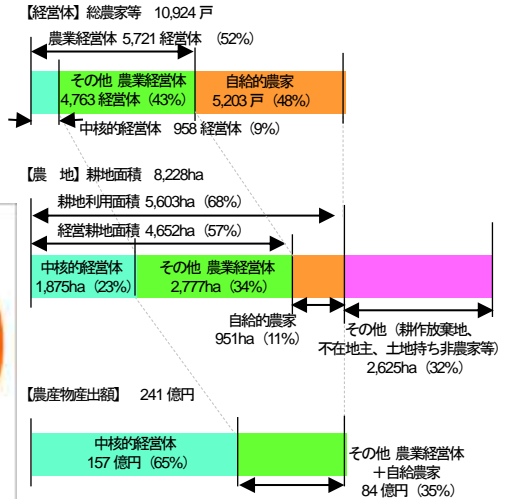
～豊かさあられる南信州農業！ 農から始まる新しい交流文化～

農業・農村の特徴

- 南信州地域は、山間傾斜地が多く1戸当たりの耕地面積が狭いものの、標高差や温暖な気候に恵まれ、多品目の果樹、野菜、花きが栽培されているほか、肉用牛、養豚等の畜産も盛んです。
- 特に、地理的表示（G I）保護制度に登録された「市田柿」をはじめ、りんご、なし、もも、ぶどうなどの果樹の生産が多い地域です。
- 観光農業やグリーンツーリズムも盛んで、都市と農村の交流が活発に展開されています。
- 一方で、農業者の高齢化や農業水利施設の老朽化などの課題が顕著になっています。



【平成27年】(2015 農林業センサスより推計)



めざす姿

I 次代へつなぐ南信州農業

- 農家の後継者、U I ターンの新規就農者、定年帰農者など多様な担い手により、南信州地域の特徴を活かした農業経営が展開されています。
- 円滑な樹園地継承や新品目の生産拡大等により県内有数の果樹産地が維持され、また、野菜や花きの多品目生産による安定した複合経営が展開されるなど、多様化する消費者志向に適応する総合産地が形成されています。
- 牛肉や豚肉等の畜産ブランドや伝統野菜など特徴ある農畜産物も安定して生産されています。

II 消費者とつながる南信州の食

- リニア新時代の交流・流入人口の増加を見据えて、新たな地域特産品開発や6次産業化が進展し、南信州らしい「観光+農業」が一層盛んになっています。
- 食育を通して子供たちの「食」への理解が深まり、地消地産が更に定着しています。

III 人と人がつながる南信州の農村

- リニア関連開発と調和した秩序ある農地利用が展開され、併せて、荒廃農地対策や野生鳥獣対策等の効果により魅力的な農村の景観が守られています。
- 移住・定住者の増加により新たな農村コミュニティが形成され、地域のニーズに即した農業関連ビジネスも発展しています。
- 農業水利施設の計画的な改修により安全で災害に強い地域づくりが進められるとともに、農業用水を使った小水力発電など地域資源の活用が進展しています。

地域の特徴的な取り組み

- 地域を横断するリニア中央新幹線や三遠南信自動車道の工事が進み、開通後の都市部との交流に大きな期待がよせられていることから、I ターン新規就農や農ある暮らしなど移住・定住促進の具体的な対策を進めます。
- 県内で初めて地理的表示（G I）保護制度に登録された市田柿やりんごのシードルなど果樹生産を中心に産地ブランド化の強化に取り組みます。

施策の展開方向

I 次代へつなぐ南信州農業

重点取組 1 南信州農業の次代を担う人材の確保・育成

農業法人や個別経営体により、果樹を中心に野菜、花き、畜産、菌茸など様々な農業経営が展開されていますが、小規模な農家も多く、人口減少社会の中で、農業の人材育成は、地域全体で取り組むべき喫緊の課題です。

このため、行政と農業団体が連携し、農家の後継者はもとよりU I ターンの新規就農者や定年帰農者など多様な担い手の確保に努める必要があります。

達成指標	現状 (2016年)	目標 (2022年)
□45歳未満の新規就農者数	28人/年	28人/年
□U I ターン就農者数	5人/年	5人/年

施策の展開方向

- 県、市町村、J Aと連携し相談活動や研修事業等の充実による担い手確保の強化
- 各種セミナー、研修会による新規就農者や中核的経営体の資質向上
- 県農業大学校研修事業の南信州での実施や帰農塾等によるU I ターン含む定年帰農者への支援の充実



【新規就農対象の研修会】

重点取組 2 新技術や新品種拡大による競争力の強い果樹産地づくり

りんご、なし、柿、もも、ぶどうを主力とする県内有数の果樹産地ですが、消費低迷や後継者不足などで円滑な産地継承に懸念が生じています。

消費者ニーズの高い品目や新たな品種への転換、省力化生産技術の拡大、地球温暖化への対応等により高品質で競争力の強い果樹産地づくりが必要です。

達成指標	現状 (2016年)	目標 (2022年)
□柿の栽培面積	517ha	542ha
□ぶどう無核大粒品種の栽培面積	21.8ha	25ha

施策の展開方向

- シナノリップなどりんごの新品種を含めた県オリジナル品種の戦略的拡大
- 市田柿の生産拡大と「市田柿+α」複合経営の推進
- りんご新しい化栽培やなし樹体ジョイント仕立て栽培など省力化と生産性向上の推進
- シャインマスカットやナガノパープル等無核大粒品種の生産拡大によるぶどうの産地化



【柿の吊るし干し(柿すだれ)】

重点取組 3

マーケットインの複合産地の構築

気象特性を活かし、多品目の野菜や花きのほか、畜産やきのこ、茶など多様に生産される複合産地を形成していますが、今後、人口減少による消費低迷など産地間競争は厳しさを増していくと考えられます。

このため、更なる品質の向上や作期の拡大などマーケット需要を踏まえた戦略的な産地の構築が求められています。

達成指標	現状 (2016年)	目標 (2022年)
□きゅうり・アスパラガス施設面積	32ha	37ha
□白ねぎ等新品目栽培面積	23ha	26ha
□信州プレミアム牛肉認定頭数	682頭/年	765頭/年

施策の展開方向

- きゅうり・アスパラガスの施設化の推進
- 白ねぎ等新品目の作付け推進
- ダリア等 200 種類以上の多品目花き生産への支援
- 県内一の茶産地の維持
- 需要に即したきのこ生産
- 信州プレミアム牛肉・銘柄豚など畜産物の生産拡大
- ICT 等新技術の導入検討



【きゅうりの施設栽培】

重点取組 4

稼ぐ農業ビジネスに向けた高付加価値化の推進

観光農園をはじめ、シードル等新たな農産加工品開発(6次産業化)や市田柿の地理的表示(GI)保護制度登録、伝統野菜の安定生産、環境にやさしい農産物認証やエコファーマーの取得など農産物の高付加価値化に取り組む農業経営が拡大しています。

引続き、安全・安心な農畜産物の生産を基本に、消費者や食品産業側の求める付加価値を適確に捉え、新たな需要を開拓していくことが求められています。

達成指標	現状 (2016年)	目標 (2022年)
□ 伝統野菜認定数	11種類	13種類
□ 6次産業化総合化事業計画達成件数	1件	4件

施策の展開方向

- シードルなど新たな地域特産品の開発の推進と消費の拡大
- 輸出を志向する取組や認証取得等高付加価値販売を目指す取組への支援
- 伝統野菜をはじめとした地元食材の食べ方提案等による消費誘導
- 食品産業との連携への支援



【南信州伝統野菜フェア】

II 消費者とつながる南信州の食

重点取組 5

食育の推進と交流を通じた地消地産の拡大

都会の援農ボランティアを受け入れるワーキングホリデーや、くだもの狩りの観光農園、棚田オーナー制度など、都市と農村の交流が活発に展開されていますが、今後は、リニア中央新幹線と三遠南信自動車の開通により交流の拡大が見込まれます。

このため、食育を一層推進し、地域固有の食文化や地域食材への理解を深めることにより、地元農畜産物のPRの拡大につなげ、一過性でなくリピーターとして、また居住する都市部においても求め続けてもらえる南信州ならではの地消地産が期待されます。

達成指標	現状 (2016年)	目標 (2022年)
□都市農村交流人口	193,755人	213,900人
□販売金額1億円以上の農産物直売所数	7箇所	8箇所

施策の展開方向

- 小学生や未就学児との農業体験会の開催など教育現場との協働による食育の強化
- 直売所の品揃え強化・ネットワーク化等による消費誘導
- 市田柿など地域特産品のレシピ開発や料理講座等への支援
- 交流人口増加を見据えた地元農畜産物のPRと「観光+農業」の推進
- 地元民俗芸能と食文化、地域食材等を融合させる「食」を介した交流の促進



【園児の農業体験会】

III 人と人がつながる南信州の農村

重点取組 6

農を基軸とした多様で豊かな地域づくり

人口減少・高齢化が急速に進行する中、地域の人材確保は非常に重要な課題です。交流が盛んな南信州の強みを生かし、都市から人を呼び込み、移住・定住者を含む新たな経済活動や農村コミュニティを創出することが期待されます。

また、四季折々豊かな農作物があふれる美しい農村景観を次代へ継承していくため、集落での荒廃農地や野生鳥獣害の対策活動が重要であり、同時に地域農業に欠かせない農業水利施設などの長寿命化対策や、農村地域の防災・減災対策を着実に進め、安全で住みよい農村づくりに取り組む必要があります。

達成指標	現状 (2016年)	目標 (2022年)
□計画期間中に整備する重要な農業水利施設の整備箇所数		6か所/5年間
□多面的機能及び中山間直接支払取組面積	2,751ha	2,993 ha

施策の展開方向

- 農業体験型研修の充実等による移住・定住者の支援
- 企業法人等による荒廃農地の活用や農地中間管理事業等の活用による農用地利用の最適化の推進
- 農村の多面的機能の維持と小水力など地域資源の活用促進
- 農業用施設の長寿命化及び農村の防災対策の推進
- 食材の移動販売や配食サービスなど中山間地域におけるビジネスモデルの検討



【老朽化が進行し漏水が著しい農業用水路】

